

第13回東邦看護学会学術集会を終えて

大会長 遠藤 英子

(東邦大学看護学部教授・健康科学部〔仮称〕設置準備室室長)

平成25年12月21日、第13回東邦看護学会学術集会
が看護学部の校舎にて開催された。研究会から学会に移
行し4回目の学術集会であった。東邦看護学会(会員総
数1700名以上となる)も斎藤益子前理事長から横井郁
子理事長に移行された年でもあった。

昨年の学術集会が「急性期医療を提供する病院と地域
との看護の連携」をテーマに開催されたことを継いで、
今回は連携を支える看護師一人ひとりの“看護の力”に
ついて考える機会にしたいと願い、「今、求められる看護
の力とは」をテーマに開催した。

参加者は384名、そのうち東邦大学関係以外からは
24名、蒲田リハビリテーション病院、大森山王病院、大田
病院、牧田総合病院、小田原循環器病院、鹿児島市医師会
病院、大阪赤十字病院、公立福生病院、筑波大学と多施設
よりお集まりいただき、喜ばしい限りであった。

冒頭の会長講演では、人間の基本的欲求のひとつであ
り、看護の本質でもある「食べる」ということに焦点をあ
てた。在院日数短縮に伴い、その人らしい食生活が確立
しないままに在宅医療に移行している現状をあげ、我々
は一人ひとりの患者にあわせた看護援助を実践できている
のかと疑問を投げかけた。講演の最後に山崎純一学長
より、医療を支える看護に対し激励の言葉を頂いた。

特別講演では愛知県立大学の鎌倉やよい教授をむか
え、「摂食・嚥下のメカニズムをふまえた援助の再考」を
テーマにお話していただいた。人体の機能や疾病の知識
が盛り込まれた、専門的な深みのある講演であった。更
にシンポジウムでは「他職種と共に考える摂食・嚥下支
援の現状と展望」をテーマに、東名厚木病院看護師で摂
食嚥下療法部主任を務める芳村直美さん、大森病院口腔
外科診療部長で栄養治療センター嚥下障害対策チーム
長を務める関谷秀樹准教授、大橋病院摂食・嚥下障害看
護認定看護師の石間恵美さん、佐倉病院言語聴覚士の治



田寛之さんをお迎えした。各シンポジストともVTRにて
日常の食への取り組みを紹介し、そののち体験に基づいた
将来展望や思いなど熱弁を振るった。会場内は“食を支
える看護”への期待が高まり、盛況にて終了した。

今年の学術集会賞は、中村幸子さんらの「都内にある
大学病院の看護師の夜勤・交代制勤務に関する実態調査」、
岡田美奈さんらの「ICU・CCUにおける夜間の光環境の実
態調査」、根井あずささんの「慢性心不全看護認定看護
師としての活動報告」の3題が受賞した。惜しくも受賞
を逃した他の演題も、時流を捉えた興味深いものであ
った。

今回、学会運営の新たな試みとして、各人が参加登録
をホームページから行うことに加え、参加費支払いも従
来の施設ごとの回収ではなく振込とした。また、広報活
動を拡大し、積極的なポスター配布や雑誌掲載などが実
を結び、東邦大学関連以外からの参集もあった。今後
に向けても、益々の学会の発展に会員相互の協力体制が
あることを期待したいと思う。

最後になりますが、今回の学会を成功裏に終了できた
のは、参加下さった皆様方、企画・運営にご尽力下さった
方々のお陰であったと思い、この場を借りて深謝いたし
ます。

特別講演の座長を終えて

菊地 京子

(東邦大学医療センター大橋病院)



特別講演の座長という貴重な役割を頂いたことに対し、大会長に感謝申し上げます。

鎌倉やよい先生のエネルギーッシュなご講演に魅了され、座長の役割を少し離れ聴衆の1人として引き込まれていました。私もかなり前になりますが、脳神経外科病棟に6年間勤務していました。うまく飲み込めない患者さんが、誤嚥しないようにどのように介助したらよいのかと悩んだ経験があります。あの頃の自分が摂食・嚥下機能をきちんと理解していなかったこと、自分の経験から習得した方法で関わっていたことを思い出しました。今回のご講演で看護実践場面の疑問が研究により裏付けされ、日々の看護に生かされていることを改めて実感しました。また、専門職のチームによりスクリーニングや造影検査、診断、訓

練方法が確立しつつあること、それらを実践するためには、看護師のアセスメント（摂食・嚥下機能に問題がある）が重要であることを学びました。座長の席から参加されている方々の真剣な視線を感じ、会場の皆様が「看護の力」と、看護の役割を改めて考える時間を共有できたと感じました。本当にありがとうございました。



“口から食べる”を支援する看護の力・組織の力

中原 るり子

(東邦大学看護学部)

今回のシンポジウムは大会のテーマの、「看護の力」について考える機会となった。大会長である遠藤英子先生のご発案で企画されたシンポジウムは、“口から食べる”援助を日々実践している摂食嚥下の専門家の方々をお招きして、現場ならではの課題と取り組みを踏まえて今後の展望について議論する活気あふれる90分となった。

今回のシンポジウムの特徴は、(1)現場の声をVTRで届けること、(2)3病院の現状と課題を現場目線で示すこと、(3)先進的な取り組みをしている東名厚木病院から課題解決の示唆を得ること、(4)“口から食べる”を組

織的に支援するための礎を築くことの4点であった。

シンポジストはご登壇順に、石間恵美さん(大橋病院認定看護師)、関谷秀樹さん(大森病院口腔外科歯科医師)、治田寛之さん(佐倉病院言語聴覚士)、芳村直美さん(東名厚木病院)である。はじめに、3病院の現場スタッフが抱える課題や疑問を取材したVTRが流され、それにシンポジストが答えるといったリレー形式で進められた。現場の声をVTRで流すという企画は他には類がなく、現場の雰囲気や伝わる効果的な方法と評価された。

“口から食べる”をあきらめず、看護の力を信じる重要性、様々な困難があっても職員を巻き込みながら、組織として摂食嚥下支援に関わる重要性を再認識したシンポジウムであった。



研究奨励金受賞者の声



井村 幸恵 (東邦大学看護学研究科博士課程)

この度は、東邦看護学会より研究奨励金を授与していただき有難うございました。性行為の多様化や若年化に伴い、近年、淋菌感染症において抗生剤が効かない耐性菌が問題となっております。また、感染の報告数も一定で推移しており、減少しているとは言えない状況です。そこで、この研究を通して、感染患者の淋菌の薬剤に対する感受性や遺伝型を調査し、その患者の感染源や性様式などの背景から、その地域で主流となる淋菌の特徴がわかります。それらの実態より、より具体的な性感染予防や教育、保健指導などの一助になるよう、共同研究者の協力を得て研究に励みたいと考えております。

共同研究者：金山明子、小林寅喆 (東邦大学看護学部)

研究課題：川崎市において分離した淋菌の細菌学的および遺伝学的検討



大場 薫 (東邦大学医療センター大橋病院)

この度は、研究奨励金を受けることになり有難うございました。医療現場で働く看護師は、入院期間の短縮化や超高齢化社会などの影響を真っ向から受け、以前にも増して過酷な労働条件の下、日々看護を行っています。このような労働環境を少しでも改善し、健康で働き続けることができる職場環境にしたいと考え、夜勤・交代勤務の改善に取り組んでいます。慣習化された業務の実態を把握し、看護職ひとり一人が自らの健康を過信することなく、より健康な状態で働くことが、よりよい看護の提供に繋がると考えております。今回協力頂いた、多くの研究協力者の貴重なデータを職場環境の改善に必ず繋げられるような成果を報告したいと考えております。

共同研究者：小林敏子、増淵孝子、長能みゆき、佐々木由紀、工藤智佳子、屋良千鶴子、大城みゆき、岸野信代、奥谷佐智子、原田恭子、浅木貴子 (以上 東邦大学医療センター大橋病院)、山田緑 (東邦大学看護学部)

研究課題：タイムスタディによる看護業務量調査



平中 宣吉 (東邦大学医療センター大橋病院)

この度は、研究奨励金を受けることになり、感謝申し上げます。看護学部の山田緑准教授の指導も受けながら、この研究を開始してもうすぐ3年目に突入します。私共が働く、HCU・循環器内科・心血管外科混合病棟では、全ての患者が同じプログラムで術後のリハビリテーションが実施されている現状があります。開胸・開心術後の心臓リハビリテーションの進め方には、術前のADLや術後の状態を考慮したプログラムが必須と考え、アルゴリズムを作成し、患者・看護師にとって有意義な研究となるよう、共同研究者とともに研究に励む所存です。

共同研究者：水野由美子、山岸優、松本裕子、佐々木由紀 (以上 東邦大学医療センター大橋病院)、山田緑 (東邦大学看護学部)

研究課題：開胸・開心術後の心臓リハビリテーションにおけるアルゴリズムの作成



学術集会賞受賞者の声



岡田 美奈

(東邦大学医療センター佐倉病院)

睡眠に影響を及ぼす3大環境要因は温度、音、光であるといわれており、

これらは睡眠時間や睡眠の質に大きな影響を及ぼすとされています。当ICUでは以前、音環境に関する研究が行われましたが、今回私たちは、光に着目し実態調査を行いました。

ICUの測定時間の平均照度はJIS照度基準で定められている深夜の病室および廊下の基準照度を上回る結果となり、特に蛍光灯や処置灯の点灯は周囲のベッドへ与える影響が大きいことが明らかになりました。このことから夜間の照明のありかたについて、スタッフと共通認識し、集中治療の場であってもより良い睡眠環境を提供できるよう取り組みたいと思います。

課題研究(口演): ICU・CCUにおける夜間の光環境の実態調査



中村 幸子

(東邦大学医療センター大橋病院)

この度は、学術集会賞を頂きありがとうございました。今回の研究発表に

於いて、看護管理者として、全国的に看護師のおかれている労働環境の動向を受け、自分達の職場の状況、スタッフの現状を把握し職場環境を整えていかなければいけない責任を感じました。ここに受賞という形で評価を頂き、改めて管理者としての重責を感じております。

発表を通し、自分達の職場のことでなく、学会員の皆様、参加者の皆様と情報共有し、ご質問を頂いたことは、大変有意義であったと思っております。発表の機会を頂いたこと、受賞を頂いたことに感謝申し上げます。

課題研究(口演): 都内にある大学病院の看護師の夜勤・交代制勤務に関する実態調査



根井あずさ

(東邦大学医療センター大橋病院)

慢性心不全看護認定看護師として活動を始めて1年、自信を持って言える

成果を出せずにいた頃、師長より東邦看護学会へ活動報告を出してみるよう勧めがありました。

これまでの活動を振り返ってみる事、そして、慢性心不全看護認定看護師の仕事を知ってもらおう為にもやってみる事にしました。

認定看護師は皆に使われてこそ意味があると学校で言われてきました。どう使ってもらおうか、まずは自分の仕事を知ってもらい、一つずつ丁寧に対応していきたいと考えています。まだまだ力不足ですが、このような賞を頂き嬉しく思います。ご協力いただいている方々に感謝し、頑張りたいと改めて考えています。

課題研究(口演): 慢性心不全看護認定看護師としての活動報告

研究に関するよろず相談コーナーを終えて

研究活動支援委員長 **福田 美和子**

研究活動支援委員会では、前回の学術集会に引き続き今回も研究相談コーナーを設けました。この相談コーナーの目的は、本学術集会への演題数ならびに学会誌投稿論文数の増加と研究の発展に向けた支援を行うことです。今回は文献検索のためのキーワード探しや研究方法論の検討、いくつかの研究疑問から一緒に研究テーマへ絞り込むディスカッションなど個別に行いました。将来的には個別相談だけでなく何か臨床研究を実際に行う上で抱える悩みなど共有する場として、さらには病棟組織を超えた共同研究に発展できる場になればと思っております。

今後も相談コーナーを継続いたしますので、次回学術集会でご活用いただければと思っております。

サロンを開催して

看護キャリア支援センター長 **横井 郁子**

東邦大学看護キャリア支援センターのサロンに立ち寄っていただいた方々の相談内容はなんと「研究」。研究方法ではなく研究のための環境についてです。「統計ソフトが入ったパソコンを借りたい」「3病院看護部対象の調査をしたのだから予想以上に手続きに時間がかかった。何か方法があったのだろうか」等々でした。研究しやすい環境を整えることは看護キャリア支援センターの役割だと認識しています。道具や手続きで消耗しないよう看護キャリア支援センターでできる研究支援を模索したいと思っております！

次回学術集会に向けて

第14回東邦看護学会学術集会大会長

佐藤 ちず子

(東邦大学医療センター大森病院)



超高齢化社会への加速とともに、医療現場では認知症の合併やせん妄を呈した患者のケアも多くなっています。看護師たちは急性期の医療を安全に、そして私たちのコンセプトである“心によりそう看護”をどのようにしたら提供できるか昼夜悩みながら奮闘しています。65歳以上の高齢者に占める認知症の人は15%に上り約462万人、85歳以上では40%以上が認知症と診断されるとの報告もあります。

今後急速に高齢化が進むと見込まれている「都市部」に立地している急性期の医療機関として、患者の尊厳を大切にしながら、いかに安全で安心な医療を提供していくかを皆さんと一緒に考える機会にしたいと思います。

NEWS LETTER

ニュースレター事務局

〒143-0015 東京都大田区大森西 4-16-20

TEL 03-3762-9881

FAX 03-3766-3914